

2026年のエンタープライズAI戦略

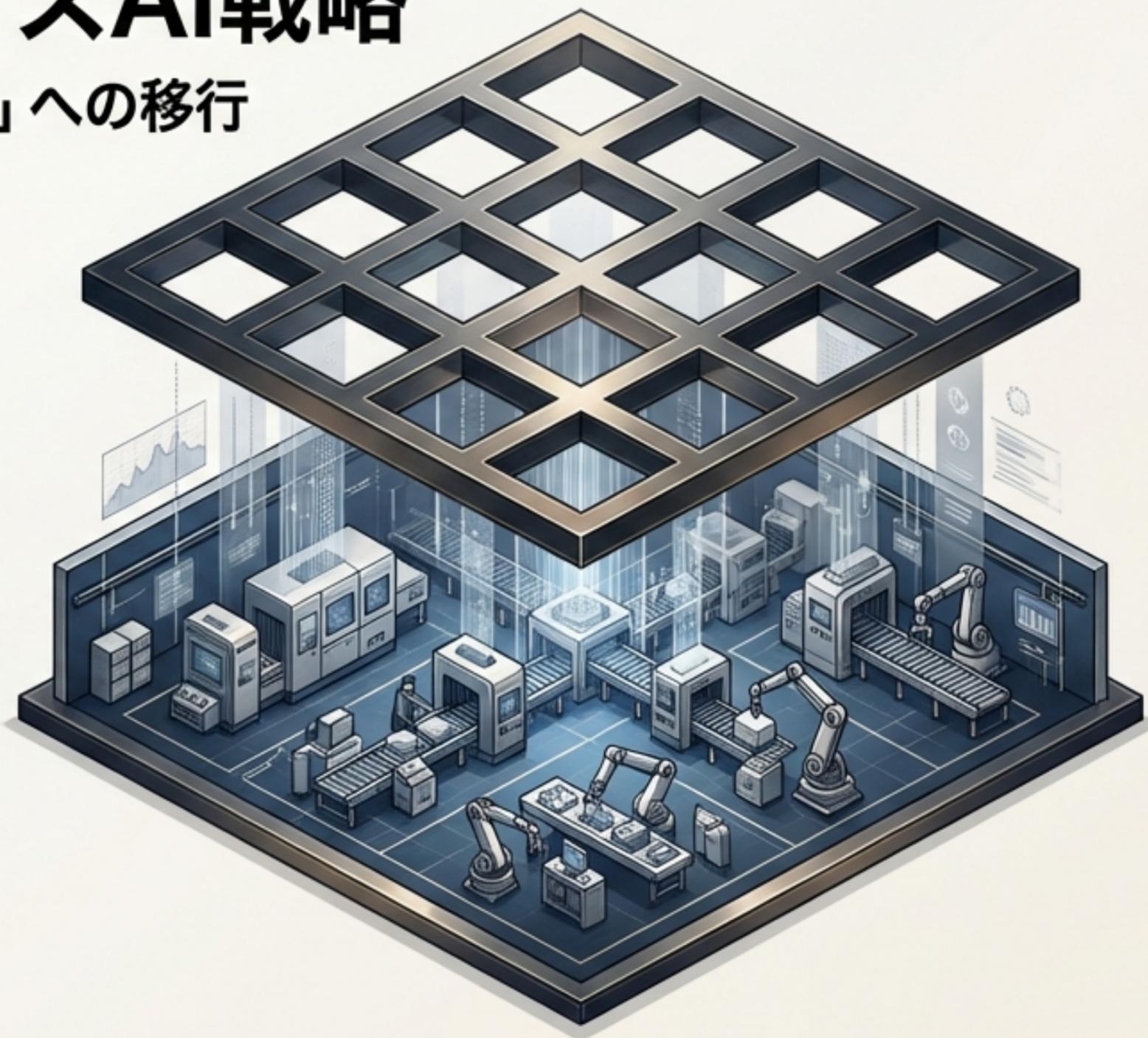
社会実装フェーズの本格化と「フィジカルAI」への移行

生成AI新設の移行

- 日本市場における生成AIが単に実用しているRobitcity、エンタープライズAIに核を進む（X、Trust Blue）
- 社会実装フェーズの本格化と、「フィジカルAI」への移行
- ビジネスのエンタープライズAIへの移行

生成AIへのエンタープライズへの移行

- 日本市場における生成AIは単なる業務効率化ツールから、ビジネスプロセス・リエンジニアリング（BPR）の核となる「不可欠な社会インフラ」へ完全に移行した。



日本市場における生成AIは単なる業務効率化ツールから、ビジネスプロセス・リエンジニアリング（BPR）の核となる「不可欠な社会インフラ」へ完全に移行した。

エンタープライズAIは「テスト段階」から「全社インフラ」へ劇的に移行する

- **19% -> 69%**: 2024年の「テスト・一部導入」から、2025-2026年には69%の企業が「**全社規模での本格導入**」へシフト。
- **90%**: 導入検討企業の約90%が、海外の汎用モデルではなく「**国産LLM**」の採用を強く希望。
- **1,016億円 -> 391億米ドル**: 国内生成AI市場は2024年に1,000億円を突破し、2034年までCAGR18.80%で急成長を続ける。

69%

生成AI導入企業の全社導入目標
(2025-2026年)

約90%

導入検討企業における
国産LLMへの期待度

生成AIの導入フェーズ推移

2024年
(実績: 導入済・テスト中)

19%

2025-2026年
(計画: 全社導入目標)

69%

2026年は変曲点。大半の日本企業が「PoC（概念実証）」を脱却し、
国産LLMを前提*とした全社実装へ踏み切っている。

パブリックデータの枯渇「2026年問題」が価値の源泉を変える



モデルの規模拡大（パラメータ数）だけを追求するアプローチは限界を迎える。
今後の競争力は「インターネット上に存在しない自社固有のデータ」をいかにAIに適用できるかで決まる。

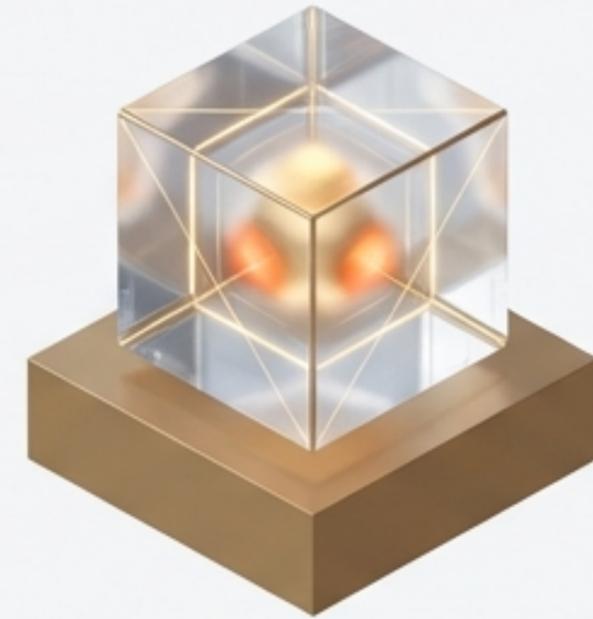
データが増えない時代において、競争力の源泉は「汎用知識」から「企業独自の秘匿データ」へと完全に移行した。

「万能な黒い箱」から「透明な相棒」への不可逆的なシフト



Global Big Tech AGI (万能な黒い箱 - Black Box)

- ・環境: パブリッククラウド専用 (Public Cloud)
- ・懸念: データ漏洩リスク、コンプライアンスの不確実性
- ・特性: 驚異的なデモ性能、しかし推論根拠が不明瞭



Domestic Sovereign AI (透明な相棒 - Transparent Partner)

- ・環境: オンプレミス / 閉域網 (On-premise / Closed Network) - ***企業の90%が要望***
- ・優位性: データ主権の完全な確立、経済安全保障への適合
- ・特性: 説明責任 (根拠の提示)、人間中心の業務伴走者

企業はAIに対する評価軸を「何でもできるAI」から「自社の閉域網で安全に使われ続けるAI」へとアップデートしている。

2026年 国内主要AIベンダーの戦略的棲み分けと採用領域

メガITベンダーは単純な性能競争を回避し、「軽量化・エッジ」「圧倒的計算資源」「レガシー連携」へと自社の強みを明確にフォーカスしている。

ベンダー名	主要モデル/製品	戦略・技術的特徴	主な採用業界・ユースケース
NTT	tsuzumi 2	超軽量設計 (1GPU稼働可能) ・高セキュリティ	金融・医療・自治体 (閉域網・オンプレミス)
NEC	cotomi Fast v2	超高速推論・AIエージェント化 (cotomi Act)	製造業 (リアルタイム制御) ・官公庁
ソフトバンク	Sarashina	超巨大モデル (4,600億パラメータ) ・ソブリンククラウド	通信インフラ最適化・大規模データ処理
富士通	Takane / Kozuchi	既存基幹システムとの高度な連携・BPR推進	地方自治体 (電子請求・財務システム連携)
PKSHA Technology	PKSHA AI Agents	特化型SaaS (チャット/ボイスボット国内シェア1位)	金融コンタクトセンター・社内ヘルプデスク
エクサウィザーズ	exaBase 生成AI	セキュアなマルチモデル統合 (アプリシェア1位)	大企業全般・官公庁 (社内データ連携)

2026年のAI市場は「多様な戦略の並存期」。
自社の業務特性 (レイテンシ、セキュリティ要件) に最適なベンダー 選択が不可避となる。

メガベンダー戦略の最前線：極限の「軽量性」と「スピード」



NTT (tsuzumi 2)

- Core Value: 圧倒的な軽量性とフルスタック統合
- Key Specs: 1 GPUで稼働可能 (約500万円)、パラメータ60億~70億
- Traction: 国内引き合い約2,000件、AI受注額1,478億円
- Target: 金融、医療、自治体 (完全閉域網)



NEC (cotomi Fast v2)

- Core Value: 推論速度の極限追求と自律型AIエージェント
- Key Specs: 米国巨大モデル比2.2倍の高速推論、GPT-4比87-93%高速
- Traction: 「cotomi Act」による組織資産の自動抽出・エージェント化
- Target: 製造業 (リアルタイム制御)、官公庁

コストと遅延の極小化。高価なGPUクラスターを持たずとも、ローカル環境で高度なAI推論を稼働させる技術が実用化された。

メガベンダー戦略の最前線：圧倒的な「計算資源」と「基幹連携」



SoftBank (Sarashina)

- Core Value: 計算資源の暴力と産業特化型基盤の融合
- Key Specs: 国内最大級 4,600億パラメータ
- Traction: 通信業界特化「Large Telecom Model (LTM)」の統合、OpenAIとの合併展開
- Target: ソブリンククラウド支配、大規模データ処理



Fujitsu (Takane / Kozuchi)

- Core Value: 自治体DXへの深い浸透とレガシーシステム連携
- Key Specs: 130億パラメータ、BPRを前提としたシームレスな統合
- Traction: 宇都宮市でのLGWAN環境下における「1円のミスも許されない」財務会計業務の自動化
- Target: 地方自治体、公共セクター

アプリケーション層を支配するSaaSスペシャリストの躍進

PKSHA Technology (CX/EXの革新)

- チャットボット、ボイスボット、FAQの3部門で国内シェア1位。
- 金融機関等で月間30万件以上の通話を完全自動化。
- 「PKSHA AI Agents」による自律的な問題解決。

ExaWizards (セキュアな統合基盤)

- 「exaBase 生成AI」がサードパーティ対話型生成AIアプリでシェア1位。
- 大企業を中心に1,200社以上の導入。
- ガバナンスを担保した安全な「マルチモデルルーティング」。

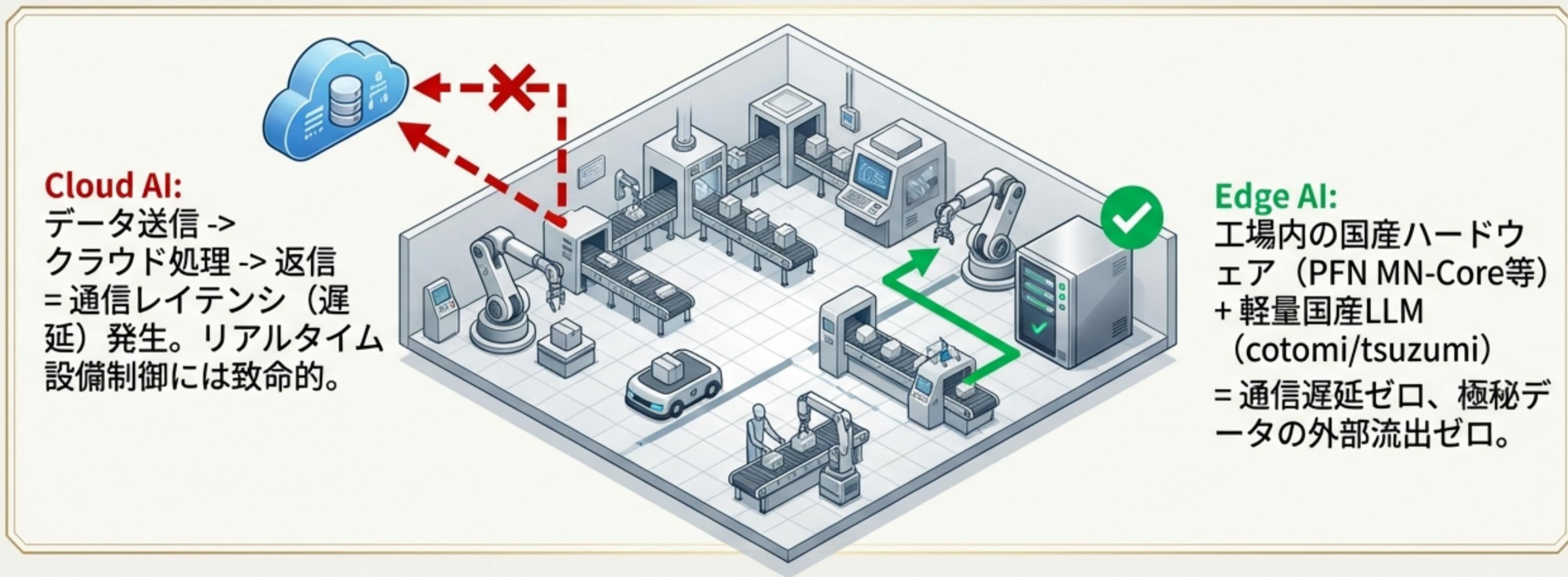
Trust Blue routing

Foundation Models

優れた基盤モデルを、直感的なUIと既存システム（Teams/Slack/基幹DB）への標準APIで現場に定着させる「実装力」がシェアを決定づけている。

最大のパラダイムシフト：「フィジカルAI」とエッジの融合

生成AIの主戦場はPC画面から物理世界（製造ライン、ロボティクス）へ。日本政府も5年間で約1兆円を投じ、産業データを活用した自律制御AI基盤を強力に支援している。



数ミリ秒の判断が求められる物理空間において、国産LLMと国産ハードウェアの「垂直統合」がグローバルにおける独自の産業競争力を生む。

ミッションクリティカル領域における事実上の標準（デファクト）



官公庁・自治体（Public Sector）

- 制約: LGWAN（総合行政ネットワーク）による厳格なネットワーク分離。
- 実装: 非定型業務（文章作成）から、基幹システムへの直接組み込み（財務会計等）へ進化。地政学的リスクを遮断。

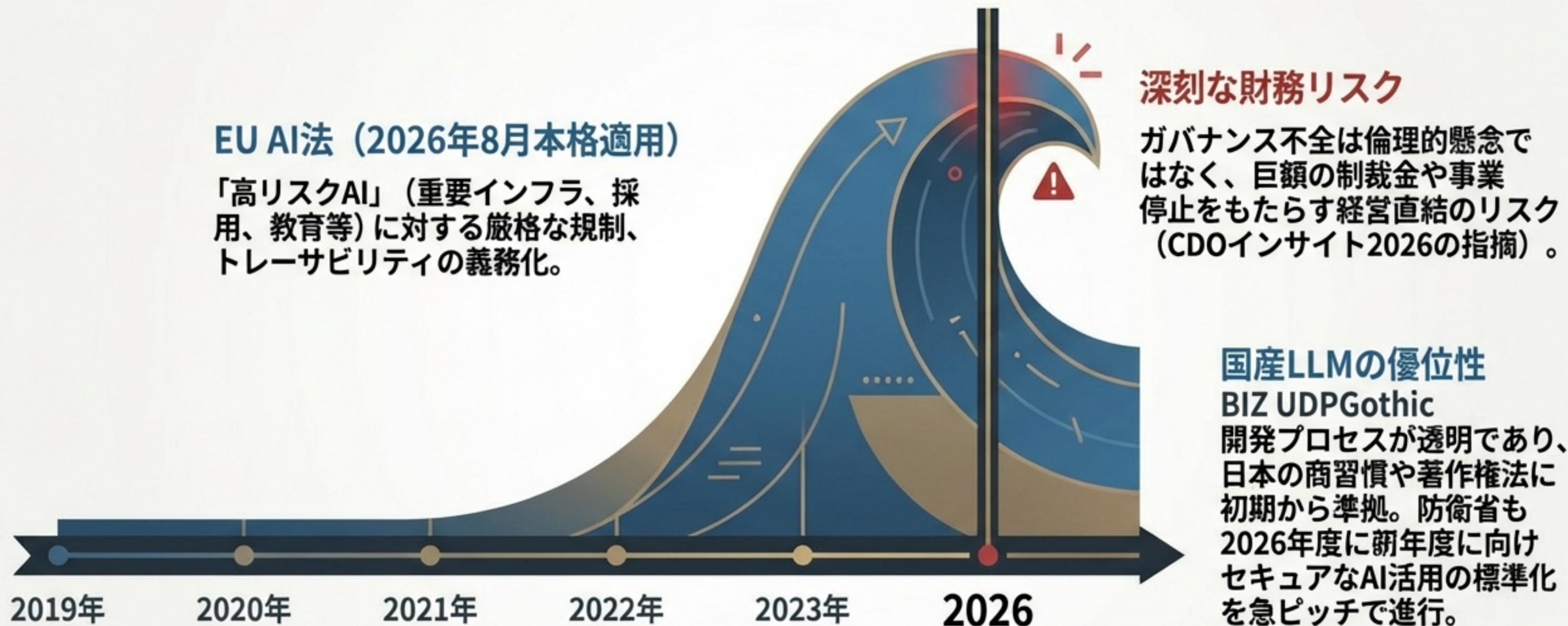


知財・特許（Intellectual Property）

- 制約: 究極の機密情報。弁理士業務AIガイドラインによる厳格な機密保持（ゼロ・データ・リテンション）。
- 実装: 特許庁「JPO AIビジョン」、デジタル庁「源内」。RAGとVDR（仮想データルーム）を統合した知財AIプラットフォームの稼働。

「1円のミスも許されない」「外部流出リスクを物理的に遮断する」領域において、
国産オンプレミス型モデル以外の選択肢は存在しない。

AIガバナンスと迫り来るグローバル規制の波



企業が直面する最大の障壁は技術的限界ではなく「規制対応とガードレール」。
説明責任を果たせないAIは、事業継続の致命傷となる。

エンタープライズAI戦略の最適解：ハイブリッド・アーキテクチャ

Outer Ring

(汎用・クリエイティブ領域)

パブリッククラウド上の海外製巨大LLM (GPT-5等)。

用途：新規事業企画、一般翻訳、広範なりサーチ。機密リスク低。

Orchestration Layer

(オーケストレーション)

クエリを自動分類し、最適なモデルへ安全にルーティングするセキュアな基盤 (ExaWizards等)。

Orchestration Layer

(オーケストレーション)

パブリッククラウド上の海外製巨大LLM (tsuzumi等 (GPT-5等))。

用途：新規事業企画、一般翻訳、広範なりサーチ。

Inner Core

(高セキュリティ・特化領域)

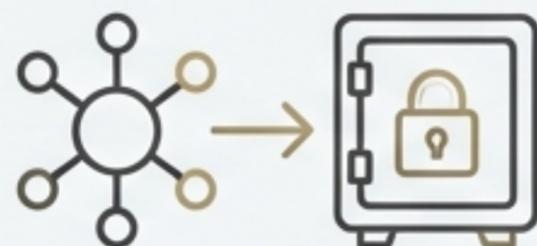
オンプレミス/閉域網の国産軽量LLM (tsuzumi, cotomi等)。

用途：秘匿社内データ、製造ライン制御、財務・法務処理。機密リスク極高。



「海外製か国産か」の二項対立ではない。適材適所でモデルを組み合わせる「マルチモデル戦略」こそが、リスクを統制しROIを最大化する唯一の手段である。

結論：技術選択から「アーキテクチャ設計」の時代へ



1. 価値のシフト: 誰もが使える汎用AIから、自社固有の秘匿データを活用する特化型AIへの移行。



2. インフラの定着: 軽量化、エッジ処理、高セキュリティを武器に、国産LLMは「日本の社会インフラ」として不可逆的な地位を確立。



3. エージェント化: LLMはチャットボットから、物理世界の制御までを自律的に行う「AIエージェント」へ進化。

2026年以降の勝敗を分けるのは単一のAI技術ではない。
全社最適を見据えた「アーキテクチャの設計力」と、
それを維持する「ガバナンス体制」である。

国産LLMは、日本企業が現場に根ざした価値創造を安全にスケールさせるための最強の防衛線であり、成長エンジンである。